広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	中国人大学生の怒り誘因と怒り相手に関する一考察 ： 中国８大学の日本語専攻の学部生を対象に
Author(s)	張，鳳雲；盧，濤
Citation	広島大学マネジメント研究 ， 22 ： 45 - 53
Issue Date	2021-03-27
DOI	
Self DOI	10.15027/50779
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050779
Right	Copyright (c) 2021 by Author
Relation	

■研究ノート

中国人大学生の怒り誘因と怒り相手に関する一考察
―― 中国８大学の日本語専攻の学部生を対象に

An investigation of the causes and objects of anger among Chinese college students

張　　鳳　雲
Fengyun Zhang
盧　　濤
Ro　　To

要　旨

本稿は，中国の８大学の日本語専攻の学部生を対象とした自由記述式アンケート調査を通じて，大学生の怒り誘因，怒り相手，および性差と学年別による両者の相違を明らかにすることを目的とする。性差から見れば，１.男性は外的要因による怒りの割合がより高いのみならず，低学年（１・２年）の男性は同学年の女性よりかなり高いこと，２.女性は内的要因による怒りの割合がより高く，また学年が上がるにつれて割合が高くなる傾向があること，３.女性より男性の方が自分の能力不足やネガティブな性格に対する怒りの割合がより高いことなどがわかった。学年別に見れば，学年を問わず，ルームメートの迷惑行動や友人の裏切り，意見の不一致などに怒りを感じることが多く，全寮制との相関関係が示される。同時に，クラスメートへの怒りは誘因が多様化しており，キャンパスが「ミニ社会」と言われる通り，すでに健全な社会的関係が築かれている。また，キャンパス外の見知らぬ人と自己に対する怒りの割合は，高学年の方が著しく高く，これはまもなく社会進出となり，将来への不安や自己成長への期待に気をもんでいるように思われる。最後に，大学生には自分への感情管理，他人への共感など，大学側と教師には「人間中心」主義，SNS においては多方面の協調を求めるべきだという解決策を考えてみた。

キーワード：怒り誘因，怒り相手，外的要因，内的要因，解決策

１．はじめに

怒りは基本感情の一つとして，研究者たちにより，さまざまな視点から考察を進められてきた。そのうち，湯川進太郎（2008）による認知学，生理学，進化論や社会学などの学際的な研究が代表的である。

姜蓮珍（2015）は中国人大学生の怒りをめぐって，遼寧省の大学生を対象にアンケート調査と個別インタビューを行ったうえ，大学生の怒り誘因は日常生活，勉強，部活，恋人，家族など５つの次元に集中しており，そして，日常生活の些細なことで怒りを感じるのが最も多いと指摘している。そのうち，１・２・３年生は勉強と部活，４年生は恋人，女性は勉強と恋人，男性は部活と勉強により多く怒りを感じていると指摘している。だが，その考察は，怒り誘因の選定基準も一致していなければ，怒り誘因の下位カテゴリーも明らかにしていない。情報化社会が進むにつれて，SNS は複合的なコミュニケーションのプラットフォームとして大学生の生活を変えてきているが，関連する研究はほとんど見られない。のみならず，怒りは攻撃的行動と繋がっており，回避したり抑制したりすべきだと思いがちである。一方で，怒りといったようなネガティブな感情は親近感を高めることもでき，親しい人間関係を守るには効果的だとも認められている（Graham, Huang, Clark & Helgeson 2008，宋丹丹・付海玲 2014，上原俊介・森丈弓・中川知宏 2018）。

そこで本稿は，自由記述によるアンケート調査を行い，中国人大学生の怒り誘因と親密関係の有無という観点から見る怒り相手を明らかにすると同時に，その裏に潜んだ原因を究明し，有効的な解決策を採り出してみる。

２．調査内容・調査結果

本稿の第二筆者は，中国の８大学（上海海事大学，上海応用技術大学，銅仁学院，桂林旅游学院，大連外国語大学，江蘇大学，広西師範大学，遼東学院）の644名の日本語学部生を対象に，2019.09～2019.12に自由記述をしてもらった。その結果，606名[1]の有効回答（男性115名，女性491名，回収率は94.1％）を得た。そのうち，１年生261名（43.1％），２年生167名（27.6％），３年生125名（20.6％），４年生53名（8.7％）である。

自由記述は，「１，怒り経験をできるだけ多く記入してください」と「２，怒りを感じたときのリアクションを記入してください」の二項目に分けている。本稿では怒り誘因と怒り相手を明らかにするのが目的なので，怒り経験の部分だけ検討する。

怒り経験に関する有効回答件数の内訳は，男性は210件（１人当たり1.83件），女性は1078件（１人当たり2.20件）である。

２．１　怒り誘因についての考察

Jerry Deffenbacher（1996）は，怒りを不愉快な（Unpleasant），不公平な（Unfair），目標達成不可能（Goals Blocked），回避可能（Avoidable）と無力感（Powerless）[2]に分類している（筆者訳）。遠藤裕子・湯川進太郎（2013）は，日本人大学生の怒り誘因を，怒り相手が自己か他者かにより二分している。さらに喚起場面（本稿の怒り誘因に相当）から，他者への怒りを故意（悪意の知覚〔不当な行為＋侮辱＋裏切り〕・配慮の欠如〔不誠実＋自分勝手＋迷惑な行為＋マナー違反〕・意見の不一致〔不理解〕）と過失（間違い）に，遭遇の回数から，他者への怒りを反復的遭遇（私的関係〔友人＋兄弟・姉妹・親など家族＋恋人・元恋人＋親戚〕・公的関係〔大学・バイト関連の同輩・知り合い＋大学・バイト関連の後輩＋教師＋大学・バイト関連の先輩〕）と一回のみ遭遇（見知らぬ人・バイト先の客・店員）にそれぞれ分類している。このような分類は，日本人大学生の対人関係を明らかにしており，本稿もこれを参考する。また，張鳳雲・盧濤（2020）は，怒り経験を外的被害，内的被害，自己責任という３つのカテゴリーに分類している。ここでは，以上の先行研究を踏まえたうえ，今回の調査結果を元に，中国人大学生の怒り誘因及び性差と学年別から見る相違を考察する。

今回の調査で，１番目の記述は合計1288件収集され，そのうち明らかに怒り誘因となるのは1266件，内訳は男性が207件（１年生68件，２年生87件，３年生32件，４年生20件），女性が1059（１年生414件，２年生313件，３年生202件，４年生130件）である。

Table1が示しているように，外部の刺激による怒り誘因は外的要因であるが，さらに１）勉強中や休み中に邪魔されたような行動を中心とした迷惑行為，２）物品の損壊，盗難被害などを中心とした金銭的損失，３）自分や好きな人への物理的な攻撃（喧嘩など）を中心とした言動的・身体的攻撃[3]，４）強要されたり，自分の意思を押し付けられたりする行動阻害，５）一致していない意見，言い争いなどを中心とした意見の不一致，６）宅配便や配達員の業務上のミス，チームナンバーの失敗などという相手の過ち，と分けている。性差からみれば，外的要因による怒り誘因は男性と女性との割合は全体的に（43.0％vs.32.01％）[4]であり，また主に迷惑行為（19.81％vs.12.37％），言語的・身体的攻撃（6.76％vs.3.87％），相手の過ち（4.35％vs.3.02％）の３つに集中していることがわかった。 学年別からみれば，１・３年生の男性は半分ほど外的要因で怒りを感じていると分かった。

精神的ダメージによる怒り誘因は内的要因であり，さらに１）不公平に感じたり，過度に責められたり，自尊心が傷つけられたりするのが主であ

---

[1] 除外されたのは合計38名，そのうち，無回答者は25名，性別未記入者は13名。

[2] https://www.youtube.com/watch?v=kfcQaXG_Qhs 2020．05.13閲覧

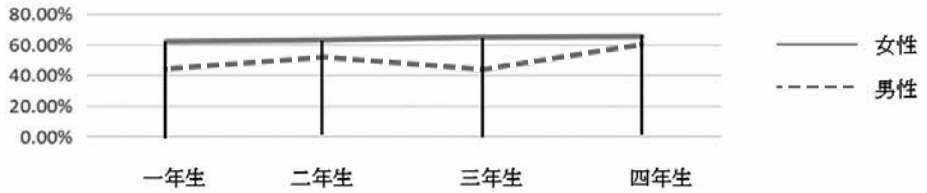
[3] 今回の調査では，アイドルへのストーカー行為，不法侵入，身体攻撃という「私生ファン」問題が幾度言及されている。本稿では，これを好きな人のへの攻撃と見なし，「身体的攻撃」のカテゴリーに入れる。

[4] 被験者数に男子学生が少ないため，本稿で男女比較はそれぞれの学年における男女割合で行う。

Table1　怒り誘因に関する自由記述回答の分類

上位 カテゴリー	下位 カテゴリー	例 （紙面制限により，筆者が簡略化した記述がある）	男性	女性	合計 （比率）
外的 要因	迷惑 行為	**学习时有人骚扰**（勉強中，邪魔された）； **朋友借了我的新手机带到课堂上，不静音，导致手机被没收**（友人に私の新しい携帯電話を講義にもっていかれ，マナーモード設定もなく，没収された）； **室友玩手机声音大，吵到自己睡觉**（ルームメートの携帯電話をいじる音がうるさくて，眠れなかった）； **老师拖堂，想上厕所**（先生が授業を遅らせたので，トイレに行きたくてしょうがなかった）。	41	131	172 （13.35%）
	金銭的 損失	**与游戏玩家在线上交易时被骗**（ゲーム相手とネット上で取引をして，金を騙し取られた）； **共享单车忘记上锁被人骑走了，钱一直被扣**（シェアリングの自転車の鍵をかけ忘れて，お金をずっと取られていた）； **网购时物品破损，卖家和快递相互推卸责任，只好自己承担损失**（ネットショッピングで不良品を買ってしまったが，売り手と宅配便業者が責任をなすりつけ合ったので，仕方がなく自分で損失を受け持った）； **停在车棚的自行车车座被拆掉了**（自転車置き場に置いてあった自転車のサドルが取り外された）； **最喜欢的眼影盘和养了好久的多肉植物被表妹弄没了**（大好きなアイシャドーと多肉植物がいとこにいじられて，なくなった）。	13	46	59 （4.58%）
	言語的 ・ 行動的 攻撃	**自身遭到攻击**（自分自身が攻撃されたとき）； **看到有人被霸凌，自己出面挡一下，跟人扭打起来**（いじめを見て，止めに入ったところ，いじめる側と殴り合うことに）； **玩游戏时，一些低素质的玩家恶语相向**（ネットゲームの時他のプレイヤーに暴言を浴びられた）； **工作人员语言攻击**（スタッフに言葉で攻撃された）。	14	41	55 （4.27%）
	行動 阻害	**被强迫做无意义的事**（無意味なことを強いられた）； **有人“监视”我的生活，各种询问，感觉不爽**（プライバシーに関するいろいろな質問を聞かれて，監視されているようで不愉快に思った）； **父母以为我好的名义，干涉我的生活**（親は「あなたのため」と私の生活を干渉してくる）； **学校里讲座，活动多**（大学での講座や活動が多すぎて迷惑）。	6	47	53 （4.11%）
	意見の 不一致	**与无脑人士交流，思想发生分歧，三观不合时**（バカな相手とうまくコミュニケーションが取れない）； **与母亲因为一点小事争执**（母親とつまらないことで言い争った）； **与男友吵架**（彼氏と喧嘩した）； **与他人做事有偏差，TA 还不讲理，固执己见**（仕事のやり方にバラつきがあるのに，まったく理屈が通じず，自説を固持している）。	6	43	49 （3.80%）
	相手の 過ち	**邮局工作人员不负责任，导致信件 4 次下落不明，心血付之东流**（無責任な郵便配達員に 4 回も手紙をなくされてしまい，努力が水泡に帰した）； **哥哥惹妈妈生气时**（兄が母を怒らせた時）； **上课时被老师叫错名字，尴尬**（授業中，先生に名前を呼び間違えられて，居づらい空気になった）； **工作时部员做事不好或不按时完成**（仕事中，部員が真面目にやってくれない・時間を守ってくれない）； **打游戏时被队友坑**（ゲームの味方が下手くそ過ぎる）。	9	32	41 （3.18%）
内的 要因	侮辱	**被不公平对待或过度指责**（不公平に取り扱われ，度が過ぎる批評を受けた）； **想退出学生会，但遭到学长学姐多次为难，阻挠，摆架子，搞威胁**（学生会を退会したいが，何度も先輩たちに威張りくさられ，止められ，威嚇された）； **网上有人黑自己的爱豆**（ネットで好きなアイドルに対する悪口のコメントを見た）； **发消息不回，却在群里聊天和发说说**（メッセージの返事をしないでチャットグループで発言している）； **诋毁或侮辱自己的家人或亲友**（自分の家族や親友のことを侮辱されたり，誹謗中傷されたりした）； **在学生组织工作中，工作伙伴不尊重自己**（学生の担当するイベントはチームメイトに尊重されない）。	25	161	186 （14.44%）

内的要因	欲求不満	**被朋友欺骗或背叛**（友だちに騙されたり，裏切られたりした）； **老师不认真还对学生提出各种要求**（先生は不真面目で，おまけに学生に理不尽な要求をしてくる）； **跟妈妈抱怨时没得到想要的安慰，自己的辛苦没得到家长的支持，无奈**（母に愚痴を言って，慰めを求めたところ，理解してもらえず，気持ちのやり場がない）。	23	147	170 (13.20%)
	道徳違反	**插队**（列に割り込む）； **道德绑架**（モラハラ）； **考试作弊**（カンニングする）； **看到底层人民不被尊重或被压榨**（下層の人たちが尊敬されず，圧搾されるのを見た）。	18	121	139 (10.79%)
	自分勝手	**被朋友放鸽子**（友人にすっぽかされた時）； **洗碗洗到一半别人突然把他的碗放进来**（食器を洗う最中に他人に食器を入れられた）； **未经允许私自动我东西**（私のものを許可なく勝手にいじった）； **女友化妆，让我久等**（彼女の化粧時間が長く待ちくたびれた）。	17	98	115 (8.93%)
	不当な扱い	**被冤枉，被误解**（無実の罪を着せられて，誤解された）； **朋友对我发脾气**（友人は私に怒った）； **被人诬陷**（人に陥れられた）。	7	79	86 (6.68%)
	嫌悪感	**碰到双标的人**（ダブルスタンダードな人に会った）； **出口成脏的人**（口が悪い人）； **事不关己高高挂起的人**（なんでも他人事に思う人）； **蠢人做坏事**（悪い事をするバカなヤツ）。	11	64	75 (5.82%)
自己		**应该做好却因为自身原因没做好事情**（うまくできるはずだったのに自分が未熟な故うまくできなかった）； **没有完成自己的目标**（目標を達成していない）； **自己胆小，不自信**（臆病者で，自信がない）； **即便自己很努力，结果还是不尽如人意**（いくら努力しても，満足な結果が出ない）； **昨天立的 flag，今天就倒了**（目標についてのフラグの回収が早すぎる（e.g.「ダイエットするぞ！」と宣言した翌日早速食欲に耐え切れずたくさん食べてしまった））。	17	49	66 (5.12%)
誘因を判断できない記述件数					22 (1.70%)
合計					1288 (100%)



グラフ１　内的要因からみる性差と学年別との相違

る侮辱，２）友人の裏切り，期待はずれなどが主である欲求不満，３）しつけ不足，無責任，不道徳な行動などが主である道徳違反，４）約束を破ったり，断らずに持ち物を使用したりする自分勝手，５）誤解されたり，陥られたりする不当な扱い，６）ネガティブな性格への嫌悪感，に分けられている。グラフ１に示すように，内的要因による女性と男性との割合は，全体的に63.27％vs.48.79％であり，６つのカテゴリーともに女性の方が男性より高いのみならず，各学年とも女性の方が60％を超えており，しかも学年が上がるにつれてやや上昇する傾向を見せている。それに対して，男性の方はやや揺れがあるものの，いずれも60％を超えていない。

学年別からみれば，学年と多く怒りを感じているカテゴリーとの対応関係は以下の通りである。

１年生：欲求不満，迷惑行為，侮辱，自分勝手[5]

２年生：侮辱，迷惑行為，欲求不満，道徳違反

３年生：道徳違反，侮辱，欲求不満，自分勝手
４年生：侮辱，迷惑行為，道徳違反，不当な扱い
「自己」というカテゴリーで，主に無能，自己管理ができない，ネガティブな性格などが挙げられ，男性の方がより高い割合（8.21％vs.4.63％）を示している。

２．２　怒り相手についての考察

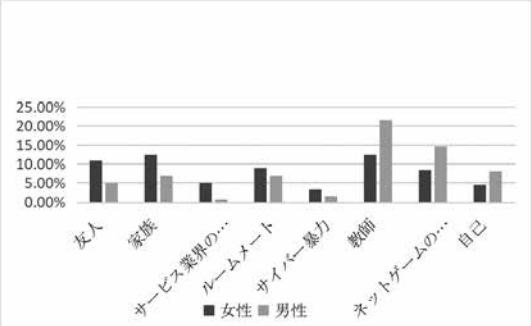
怒り相手を調べたところ，1288件[6]の記述のうち81件しか非対人場面でないため，大学生は対人場面になると怒りがちという従来の考察と一致した結果である（増田・金月・金口・寧研2005）。1207件の対人場面において，相手を明記しているまたは推測できる件数は686 件（男性116 件，女性 570 件）である。その内訳は１ 年生 272 件，２ 年生 224 件，３ 年生 123 件，４ 年生 67 件である。Table ２に示している通り，怒り相手はルームメート，クラスメート，友人，家族に集中しているが，ネット上の付き合いが58件，全体の8.45％を占めているのも興味深い。

前にも述べたように，被験者に女性が著しく多く，怒り相手も多様である。サービス業の従業員に対する男性の怒りは１件しかなく，店員の不正行為による金銭的損失である。被験者に限りがあるためか，男性にはバイト，交換留学，旅行などについての記述は見られなかった。グラフ２は性差からみる明らかな相違のあるカテゴリーを示している。即ち，女性のほうが男性より著しく率が高いのは，友人（11.03％vs.5.17％），両親や兄弟などの家族（12.46%vs.6.90%）とサービス業界の従業員（5.16%vs.0.86%），比較的に高いのは，ルームメート（9.07%vs.6.90%）とサイバー攻撃の被害者（3.38%vs.1.72%），著しく低いのは教師（12.57％vs.21.55％），ネットゲームのチームナンバーか対戦相手（8.55％vs.14.66％）と前述した自己（4.63% vs.8.21％）である。

学年別でみれば，１年生はルームメート（16.61 %）[7]，友人（16.24 %），クラスメート（14.39％），大学側（11.07％），２年生はルームメート（16.51％），クラスメート（15.60％），大学側（10.09％），３年生はキャンパス外の見知らぬ人（14.52％），自己（12.10％），家族（11.29％），クラスメート（10.48％），４年生はキャンパス外の見知らぬ人（20％），友人（16.92%），家族（10.77%），ルームメート（10.77%），自己（10.77%）によく怒りを感じている。周知のように，大学生の友情はキャンパス内の付き合いから発展していくわけで，低学年の学生（１・２年生）はキャンパス生活・家庭生活に集中しているのが自然のことであろう。それに対して，高学年の学生（３・４年生）はまもなく社会に進出するため，徐々に社会に関心を持ちはじめ，キャンパス外の見知ら

Table2　怒り相手に関する自由記述回答の分類

親密関係の有無	場所	カテゴリー	件数	男子	女子
親密関係	家庭内	家族	68	6	62
		親戚	11	2	9
	家庭外	友人	82	9	73
		恋人	15	2	13
		片思いの相手	4	0	4
非親密関係	キャンパス内	ルームメート	98	25	73
		クラスメート	91	15	76
		大学側	59	8	51
		教師	27	6	21
		先輩・後輩	6	0	6
	キャンパス外	見知らぬ人	53	7	46
		サービス業界の従業員	30	1	29
		機構のスタッフ	4	1	3
		バイト先の上司・同僚	4	0	4
		その他	10	1	9
	ネット	ゲームのチームメンバー・対戦相手	31	12	19
		サイバー攻撃の加害者	27	4	23



グラフ２　性差からみる怒り相手の相違

[5] 割合が高い方から低い方へという順で，それにトップ４を選定して記入している。以下同
[6] 今回の調査では，学校や機関などの組織に対する怒りも，対人場面として取り扱っている。
[7] （　　）は同学年に占める割合である。ここでは，高い方から低い方へという順で，10%以上のものを記入している。Table4も同様。

ぬ人や自己の不器用さに対する怒りの割合が高くなっていくのは，将来への不安や自己成長への期待に気をもんでいるからだと思われる。

２．３　特定の怒り相手とそれに対応する割合の高い怒り誘因

上原俊介・船木真悟・大渕憲一（2011）は，人間関係において，怒りは不当な事態を是正したいという欲求を告げることによって，他者との間に存在している関係規範を再確認させるシグナル機能を持っていると論じている。そして，怒りは特に自己の欲求に配意することが期待される人物に向けて喚起されると考えられると指摘している。したがって，怒り相手を明確にし，様々な人間関係の中で怒り誘因を特定することが必要であり，それが怒りの認知メカニズムの構築に好影響を与えると考えられる。調査結果から，大学生の怒り相手には，親密関係，非親密関係，自己という３つに大別し，合計19種類が関与していることがわかった。そのうち，ルームメート，クラスメート，友人，大学側，自己，両親，家族，キャンパス外の見知らぬ人に対する怒りの割合がより高い。今回の調査では，ネット上の付き合いにかかわっている内容があるため，それも考慮に入れ，怒り相手と外的要因（６つ），内的要因（６つ）との関連性を検討する。

大学生がルームメート（98件）に怒りを感じているのは，主に生活や勉強に対する迷惑行為で，合わせて74件（75.5%）となっている。クラスメートや友人に対する怒り誘因は，12のカテゴリーすべてをカバーしており，そのうちクラスメートに対する怒りは迷惑行為（17.6%）[8]の割合が一番高く，自分勝手（14.3 %），道徳違反（14.3%）がそれに次いでいる。友人に対する怒りは，主に欲求不満（37.2%），自分勝手（16.7%），不当な扱い（14.1%），意見の不一致（11.5%）の４項目であった。大学側に対する怒りは，ルールの強制による行動阻害（78.0%）に集中している。親をはじめとする家族に対する怒りは，主に意見の不一致（29.4%），不当な扱い（19.1%），行動

Table3　性差と学年別から見る割合の高い怒り誘因と怒り相手

		割合の高い怒り誘因	割合の高い怒り相手
性別	男性	迷惑行為、身体的・言語的攻撃、相手の過ち	自己、教師、ゲームのチームナンバーか対戦相手
	女性	侮辱、欲求不満、道徳違反、自分勝手、不当な扱い、嫌悪感	友人、家族、サービス業界の従業員か機構のスタッフ、ルームメート、サイバー攻撃の加害者
学年別	一年生	欲求不満、迷惑行為、侮辱、自分勝手	ルームメート、友人、クラスメート、大学側
	二年生	侮辱、迷惑行為、欲求不満、道徳違反	ルームメート、クラスメート、大学側
	三年生	道徳違反、侮辱、欲求不満、自分勝手、迷惑行為	キャンパス外の見知らぬ人、自己、家族、クラスメート
	四年生	侮辱、迷惑行為、欲求不満、道徳違反、不当な扱い	キャンパス外の見知らぬ人、友人、家族、ルームメート、自己

Table4　怒り相手と割合のより高い怒り誘因

主な怒り相手		割合が高い怒り誘因
ルームメート		迷惑行為
クラスメート		迷惑行為、自分勝手、道徳違反
友人		欲求不満、自分勝手、不当な扱い、意見の不一致
大学側		行動阻害
家族		意見の不一致、不当な扱い、行動阻害、言語的攻撃
キャンパス外の見知らぬ人		道徳違反、迷惑行為、金銭的損失
ネット上の相手	ゲームのチームナンバーか対戦相手	相手の過ち、言語的攻撃
	サイバー攻撃の加害者	言語的攻撃

[8]（　　）内のパーセンテージは，特定の怒り相手の総数に対する割合であり，以下同様。

阻害（11.8％），言語的攻撃（10.3％）に表れている。キャンパス外の見知らぬ人に対する怒りは，道徳違反（38.9％），迷惑行為（25.9％），金銭的損失（22.2％）となっている。ネット上の付き合いによる怒り誘因は，主に「ネットゲーム」と「ネットコメント」に分けられ，ネットゲームのチームメンバーか対戦相手のミス（29.3％）が主となり，次いでは言語的攻撃（10.3％），「ネットコメント」は自分やアイドルに対する言語的攻撃（12.6％）が主な誘因となっている。以上の内容をまとめてみると，それぞれ Table3と Table4のとおりになる。

３．分析

以上の結果を踏まえ，中国の大学の現状と合わせて，学生，大学側と教師，SNS など，様々な側面から効果的な解決策を講じることが求められる。

３．１　学生に求められるもの

大学生の自己修養（段慧兰・陈利华2010，王萍・任晓蛟2011，徐伟 2012等），メンタルヘルスケア（李向晟・陈文干・朱关明2006，廖美芳2017等），対人関係（秦莉2016，刘亮・刘翠莲・赵旭东2019，赵小红・朱楠2019等），感情管理（周静2011，刘康声2014，李淑臻2018等）の多面的研究が多く行われているが，本稿では，感情の認知メカニズムから学生側の対策を考えている。まず，自分の感情を認知する能力を発展させることである。安藤俊介（2016：134）の怒り感情の10段階説を踏まえ，怒りのレベルを自ら把握し，出来事の緊急性をカテゴリー別に速やかに判断することで，効果的に怒りをコントロールできる。次に，相手の感情を知覚する能力を身につけることである。劉康生（2014）は，コミュニケーションの場で，他人の感情を知覚することが，自分の感情をよりよくコントロールするのに役立つと指摘している。今回の調査では，学生はルームメートの迷惑行為や友人の裏切り，意見の不一致などに怒りを覚えることが多いのが分かった。迷惑行為と言えば，騒音，勉強と休憩時間がずれることによる迷惑が目立っている。それがキャンパスでの全寮制という集団生活と密接に関係している。今の中国の大学では，同じ専攻で同じクラス，同じクラスで同じ寮，同じ寮で同じ時間割という学校生活のモデルを徹底するのは不可能であろう。一方，競争の回避と情報の多様化という利点もあり，相互尊重，理解，共感，寛容，モチベーション，賞賛に基づき，生活での助け合い――学習での励まし合い――感情のインターアクションというモデルを構築することが可能であり，寮生活のトラブルを解決できるだけではなく，怒りなどのネガティブな感情をコントロールするのにも役立つことができるであろう。言うまでもなく，このような相互尊重，理解，共感，寛容，モチベーション，賞賛は，すべての対人関係に当てはまると考えられる。

３．２　大学側と教師に求められるもの

今回の調査における大学生の記述は，大学側や教育者の仕事上の課題が浮彫りにされている。例えば大学側に対する怒りは非合理的なルールや自由の制限，強い強制感，ネット環境の貧弱さや施設の老朽化などという「行動阻害」によるものが多い。既存システムの合理的解釈，実現可能性の調整，ハードウェアや設備の整備は，学生の帰属意識や幸福感，学習意欲の向上につながるのではなかろうか。

それと同時に，大学生への教育指導は，性別と学年に分けて行うことも求められる。前述したとおり，男性は迷惑行為，身体的・言語的攻撃，相手の過ちなどの外的要因で怒っているのに対し，女性は主に侮辱，欲求不満，道徳違反，自分勝手，不当な扱い，嫌悪感などの内的要因で怒っており，学年が上がるにつれてその傾向が強まってくる。刺激に対する学生の容認度に焦点を当て，できる限り刺激の元となるものを減らすことは，ネガティブな感情の緩和に効果だと思われる。また，低学年の学生はルームメート，友人，大学側，クラスメートに，高学年の学生はキャンパス外の見知らぬ人，自己，家族，友人，ルームメートによく怒りを覚えている。というのは，１・２年生のソーシャルワークがキャンパス内に限定されているのに対し，３・４年生は，社会への進出か進学という人生の節目にどう向き合うべきかなど，自己成長や将来への不安を抱えている。これらの違いに注意を払い，問題解決の目標とすれば，効率的・効果的な解決につながると推測でき

よう。これがまさに周静（2011）の「人間尊重というのは，何よりも第一は人間を，学生を中心に，支援を行う。これをもって，学生の感情的ニーズ（emotional needs）を満たすとは感情コントロール，大学の現状，および学生側の問題とニーズと密接につながっている（筆者訳）」という人間中心説と合致するものである。

３．３　SNS に求められるもの

今回の調査では，SNS，つまりネット上の付き合いによる怒り誘因が目を引いている。インターネットという仮想的な交流空間である SNS は，現代人の，とくに大学生の生活様式を大いに変えている。杨国欣·宋韶培（2020）は，Web 上で仮想の社会的ネットワーク（ソーシャル・ネットワーク）を構築した SNS では，大学生が様々なキャラクターを演じたり，経験したりしている。現実と仮想のアイデンティティが互いに入れ替わるだけに，キャラクターの衝突や混乱が生じやすいと指摘している。今回の調査で，周りの人に無視されること，他人からの言語的攻撃，イタズラ，ネットゲーム中の他人のミス，見知らぬ人の悪行情報へのアクセス，アイドルに対するサイバー攻撃などのような，リアルな対人コミュニケーションと重なる部分が多く出てきた。杨国欣ら（2020）が指摘しているように，オンラインコミュニケーションにあまりに耽っていると，利用した後の不安や孤独感が募り，他者とのコミュニケーションが取れず，社会的現実の分裂や共同体意識の希薄を招く。そのうち，わがままになり，さらには他人の注目を集めるため過剰に身体的・言語的攻撃を行い，ますます自己中心的になり，自己愛性パーソナリティ障害に陥りやすくなる恐れがある。よって，健全なサイバースペースを作り，実現可能な対策を講じるには，学生自身，大学，家庭，そしてまた関係業界がこぞって取り組む必要がある。

４．むすびに

今回の調査では中国の大学の日本語専攻の学部生を対象に行っているが，男子学生が少ないため，より客観的な事実を反映することを目的とする更なる調査が必要である。現在，STAXI-2の中国語版を利用し，信頼性と妥当性の検証が幾度か行われてきた（刘惠军・高红梅 2012，罗亚莉・张大均・刘云波・刘衍玲 2011）。尺度の項目が数年にわたってテストされており，信頼できない尺度ではないが，既存の外国人研究者の結果だけを参考するのは不十分である。今回の調査に現れたネット上の新たな問題点と中国人大学生の生活環境は，尺度に反映されるべきであり，今後の研究課題としたい。

（付記　本稿は，日本学術振興会令和２年（2020年）度科学研究費助成事業（科学研究費補助金）特別研究員奨励費（課題番号18F18717））「情感態度と異文化コミュニケーションに関する調査研究」及び広島大学マネジメント研究センター共同研究プロジェクトの助成を受けた研究成果の一部である。原稿修正の際，広島大学大学院社会科学研究科マネジメント専攻博士課程後期に在学中の佟一君（本稿第２オーサーの RA），大学院人間社会科学研究科マネジメントプログラム博士課程前期に在学中の後藤淳子さんから協力を得ている。記して感謝の意を表したいと思う。尚，中国語の参考文献及び学生の自由記述の内容において，一部直訳したものがあることを断っておく。）

参考文献

安藤俊介，2016，自分の「怒り」タイプを知ってコントロールする――はじめての「アンガーマネジメント」実践ブック，Discover

遠藤寛子・湯川進太郎，2013，大学生における怒り喚起の場面と対象――高校生との比較を通じて――，筑波大学心理調査第45号，pp.33-38

姜莲珍，2015，大学生愤怒情绪的诱因及影响――基于辽宁省某高校的问卷调查分析，东北财经大学学报，2015年第３期（总第99期），pp.94-97

刘康声，2014，高职院校大学生情绪自主管理状况调查，教育与职业，pp.40-41

増田智美・金築優・関口由香・根建金男，2005，怒りの自己陳述尺度の作成と信頼性・妥当性の検討，行動療法研究第31巻第１号，pp.31-44

長澤里絵・斎藤勇，2011，怒りの感情生起と個人特性の関係についての実証的研究：否定感情

表明と自己愛的甘えに焦点をあてて，立正大学心理学研究年報（2），pp.61-71
宋丹丹・付海玲，2014，大学生愤怒情绪管理与人际支持的关系，中国学校卫生第35卷第８期，pp.1255-1258
上原俊介・船木真悟・大渕憲一，2011，関係規範の違反に対する怒り感情：人間関係タイプ，欲求の関係特異性，及び欲求伝達の影響，実験社会心理学研究第51巻第１号，pp.32-42
上原俊介・森丈弓・中川知宏，2019，親密関係における怒りの感情表出と効果：生存時間分析による検討，実験社会心理学研究第59巻第１号，pp.25-36
杨国欣・宋韶培，2020，新媒体场域下大学生生活方式研究，学校党建与思想教育总620期，pp.91-93
湯川進太郎，2008，『怒りの心理学――怒りとうまくつきあうための理論と方法』，有斐 閣
張鳳雲・盧濤，2020，在日中国人留学生の怒り経験およびその対処法について，広島大学マネジメント研究第21号，pp.101-109
周静，2011，人本管理视域下高校大学生情绪管理探索，教育与管理第33期总709期，pp.64-66